

『幼馴染のアルファ様に求婚されています』

著：高月まつり

ill：陵クミコ

タクシーで珠理の住むマンションへ行き、飲み直す。

大学を卒業してからの珠理の住まいで、湊と立哉は何度も泊まっているだけあって勝手を知っている。なんなら着替えも置いてある。

冷蔵庫を勝手に開けてつまみになりそうなものを探し、かまぼこの消費期限を確認してから板わさを作る。酔っていてもこれくらいなら簡単だ。

立哉は「これでサラダを作ろう」と言って、少ししおれていた大根と人参を野菜室から取り出して、手際よく千切りにして水にさらした。

「どうすんだそれ」

「ホタテの缶詰と合わせて、それからマヨと胡椒であえる。簡単な酒のつまみを料理長に習ったんだ」

「それ、絶対に旨いやつだ！」

二人が台所にいるのが寂しくなったのか、珠理が「酒飲もう！」と大声を出す。

「みんなで飲もうと思って買った酒があるんだよ。いろいろあるから飲み比べしようね！ 立哉は明日の仕事は？」

「明日は夜勤だから問題ない」

立哉は濡れた手を布巾で拭いながら返事をした。

自分に先に聞いてくれなかったのが少しばかり悔しかったが、大事な友人相手に妬いても仕方がない。湊は勝手に「俺は明日は休みだ。その代わり、日曜は出勤だけど」と言った。

土日祝日出勤があるのは販売員のさだめだ。

湊は明日の休暇を得るために、「日曜は俺が出勤する」と同僚と交渉していた。二次会が珠理の家になることを見越して、彼とともに過ごしたいがために、こうして休暇を捻出してきたのだ。

「そうか。湊は休みか。じゃあ明日も泊まればいい。ワイシャツの替えもちゃんとある」

そのつもりでいた湊は「うん」と素っ気なく頷いて、心の中でだけ「お泊まりだ」と喜ぶ。

つまみとともにいろいろ飲んだ結果、チョコレートフレーバー以外は、「とりあえず炭酸で割ればどうにかなる」という結論に落ち着いた。

「無理だ、チョコ味のビールは俺には無理だ。先にシャワー浴びる」

立哉が首を左右に振りながら席を立ち、交代で湊が入る。珠理は、二人が残したチョコレートフレーバーのビールをようやく飲み終えてから、甘さにフラフラしながらシャワーに向かった。部屋着という名のジャージに着替えて、リビングで寛ぐ頃には時間は午前零時を少し回ってい

た。

それぞれソファや大きなクッションに体を預けて、今度は「水分補給」とばかりにコロナビールを飲む。瓶にライムを詰め込んで飲むコロナビールは、爽やかで旨い。ただ、湊には少し物足りない気がした。

「……ジュースみたいだな、これ」

テレビの深夜バラエティに下らない突っ込みを入れながら、三本目。一度、ふらつく足でトイレに行って戻ったら、珠理が両手を広げて待っていた。

煌びやかな笑顔で「こっちにおいで」と言われたら拒む理由はない。むしろ「喜んで！」と抱き締めさせてもらおう。

ビールはやめて自分好みのハイボールを作っていた立哉がそれを見て「酔いすぎ。男二人でやることか？」と突っ込みを入れた。

「そうそう。湊はすでに酔っ払ってるんだから、アルコールじゃなく烏龍茶を飲みなよ」

珠理は湊を叱るが、立哉が「お前も酔っ払ってるよ！ 珠理」と逆に叱られる。

「俺は酔ってない。これぐらいで酔うはずがない。あと、俺は抱き枕でもぬいぐるみでもないから、ベタベタするな。お前のファンにこれが知れたら俺は瞬殺される」

「俺だって酔ってないしー。ここはセキュリティ完璧で、窓があるのは向こうの部屋だから大丈夫。パパラッチは来ません。だから俺は、安心して湊を抱き締められる」

シャワーを浴びたはずなのに、珠理は香水のとてもいい香りがする。

こうしてぎゅっと抱き締めてくれるのはとても嬉しいが、親しい友人相手だからこそ簡単に抱擁できるのだと知らされているようで複雑だ。

湊の眉間に縦じわができる。

「絵面が凄いことになってるが、それでいいのかお前たちは。この酔っ払いども」

立哉が呆れて笑い出す。

「ほんとだよ。アルファとしての自覚を持てよ珠理」

こうして抱き締められて嬉しいのに、いつもの癖で憎まれ口を叩いてしまう自分が嫌い。

「……湊は俺に触られたくないの？」

「え？」

珠理の腕の中で体が強ばる。

こんなこと、初めて言われた。珠理は酔うと陽気になる男で、こんな切羽詰まった声など出したことがない。

確認をするように視線を立哉に向けると、彼も驚いて瞬きをしている。

「旨そうな桃の匂いをさせてさ、俺が桃を好きなの知ってるくせに」

「は？ 桃の匂いはいつも使ってるボディソープだろ」

「そうだけど。いや……それもあるけど……触っちゃだめなのか？ 俺はもっと触りたいよ」

いつにも増してスキンシップの激しい珠理に、湊は「はあ」とため息をついて、「彼女を作れよ。そもそも前の彼女となんで別れたんだよ。お似合いのアルファ女子だったじゃないか」と言った。

そうだと、お似合いすぎて、見ているこっちが絶望のあまり爆死しそうだった。披露宴に呼ばれて、友人代表でスピーチをすることになったらどうしようと、本気で泣いた夜もあった。

「あのアルファの女子は恋人じゃないって、何度も言ったよね？ 両親の取引先の娘さんで、お互いに両親から『そろそろいい相手を』と言われてうんざりしていたから意気投合して友人になったんだよ。お前らだって一緒に食事に行ったから知ってるだろ？ それに二人きりでは会ってません。マスコミもスルーしてるのに、なんで湊は……」

珠理が、整った顔を思いきり歪めて「彼女じゃない！」と訴える。

すると立哉が「湊は珠理を彼女に取られると思ったんだよな」と笑い、湊はすかさず「違う」と突っ込みを入れた。

「……志藤家にはもう兄さんの子供が何人もいるから俺がわざわざ子孫を作る必要もない。だから好きにさせてほしいのに、母さんや叔母さんたちが『マッチングしたわ』って、いろんなところから女子を連れてくるんだ。困ってるんだよ、湊。あー……本当にいい匂いがする～」

またしてもぎゅっと抱き締められた。

嬉しいけど苦しいし、体が勝手に反応しそうで恥ずかしい。勘弁してくれ。

「のんびりしたこと言うなよ珠理。もし、だぞ？ もしかしたら……ほら、よくドラマなんかに出てくる、運命のオメガに出会うってこともあるだろう？」

すると珠理は湊の肩に顔を埋め「そうかもしれないけど、俺は別に運命なんてどうでもいいし、正直言うと……すり寄ってくるオメガは嫌い」と低く掠れた声で言った。

「運命のオメガと出会ったら、それまで付き合っていた相手を捨てることになるじゃないか。抗えないって聞くぞ。気持ちや理性じゃなく、本能が運命のオメガを求めるんだって。……心の底から愛してる相手を捨てるしかなくなるなんて最悪だ」

「都市伝説を真に受けるなよ」

「……それに俺、好きでもないオメガの保護なんてできない。フェロモンに惑わされるのも嫌だ。何度も言うけどそういうのは最悪だと思う」

「運命の番」は、実は妻子のいるアルファや、番のいるアルファやオメガにとって、厄介なものとして捉えられる。

「運命の番」が最優先されて、自分たちの現在の穏やかな関係が壊されるからだ。

妻子を捨てて運命の相手の元に走ったアルファの話や、死ぬまで続くと思っていた番の関係を解消されて、もう生きていけずに自死したオメガの話が、まことしやかに人々の耳に入ってくる。

アルファの番となっているオメガにとって、番を一方的に解消されることは人生において絶望に近い。

精神構造上、一方的に番を解消されたオメガは、その後も番を得ることができず、辛い発情期を一生一人で乗り越えて行かねばならないのだ。

だから、番のいるアルファとオメガたちは「運命の番」をむしろ憎んでいた。

ベータたちは、自分たちにはまったく関係ない話だからと唇を綻ばせながら噂を語り、流していく。

「オメガハイトはそれくらいにしておけ。今までそんなの言ったことなかったのにどうした？」

優しく聞いてやると、珠理は「セックスは好きな相手としたいんだ」と、湊の肩に額を擦りつけて甘えてくる。

「仕事疲れで酔いが回ったな。寝た方がいいんじゃないか？」

立哉が子供を諭すように優しい声で言ってやるが、珠理は首を左右に振り「このままがいい」と我が儘を言う。

つまりそれは、俺を抱き締めていたいのか？ ……と思った途端、湊は急激な目眩に襲われた。目の前に星が飛び散り、頭がクラクラする。

酩酊なんて滅多なことじゃないのに、今まさに酩酊していた。酷い酔い方で目の前の世界がメリーゴーランドのように回り出す。酔いが醒めるどころか、心臓がドキドキして息苦しい。気持ちがいいのか悪いのかもわからない。こんな酔い方は生まれて初めてだ。

「珠理より湊の方が酔ってる？ 今日二人とも少しおかしいぞ？」

立哉は「水を持って来る」と立ち上がって、キッチンに向かう。

「俺はいつも通りでおかしくない、ぞ……」

強がりな重々承知だ。

けれど、珠理の前でみっともない姿を晒すことはできない。

誰だって、好きな相手の前では恰好良くありたい。

「俺だけじゃない。湊もおかしい。いつもなら酔わない量で酔っているし、ボディソープをちゃんとシャワーで流さなかったの？ 凄く桃のいい匂いがする。桃の匂いがしなくても、俺は湊の匂いを嗅ぎたいと思ってるけど……」

「は？ なんだ、今の。もう一回……」

今の台詞は聞き捨てならない。もう一度言ってもらって、真意を確かめなければ。なのに、どうしてこんなに眠いんだ。しかも珠理のつけている香水がいい香りで、頭の奥がじわじわと痺れていくような感覚に陥る。酒が旨くて、まだ全部飲んでいない。勿体ない。なのに。

湊は目を開けていられずに、珠理に体を預けて眠りに落ちた。

「んー……」

ゆっくりと手足を伸ばし、そっと目を開けると知らぬ天井が見える。一瞬、ここはどこだときよっとしたが、すぐに珠理のマンションの寝室だと思い出せた。

昨日の湊は、途中で寝落ちしてしまったのだ。

ああでも、珠理に抱き締められながら寝てしまったなら、それはそれで美味しい出来事だったなと、唇を綻ばせる。

変な酔い方をしたにも拘わらず、今はとても気分がいい。珠理の寝室なのに、ここにいるのが当然のような奇妙な感覚。なんと言ったらいいのだろうか、今の湊にはその感情に名前が付けられない。

「片想いも度を超すと、こんな気持ちになるのか……？」

再び枕に顔を押しつける。珠理の匂いは好きだが、ここまで安心できる匂いだったかと思議に思いながら、湊はその気持ちよさにうっとりする。甘くて、下腹が熱くなって、彼を想いながら自慰をするときの感覚が、じわじわと蘇る。こんなところではしたくない。万が一珠理に見つかったら言い訳ができないどころか軽蔑されてしまう。

こここのところ仕事で忙しくてオナニーしてなかったから、たまってたよなきつと。

そう自分に言い聞かせて、ベッドから体を起こす。

一体今は何時だろう。ところで立哉はどこで寝ているのだろう。珠理もいない。みんなどこへ行ったんだと首を傾げながら、立ち上がった。

急に立ち上がったわけではないのに目眩がして、再びベッドに倒れ込んだ。

「え？」

二日酔いになる体質ではないし、昨日は変な酔い方はしたがぐっすり寝たはずだ。貧血になるような食生活も送っていない。

湊は自分の体に何が起きたのか分からず、「やばい」と掠れ声で呟いた。

焦ったからか体が熱い。いや、これではまるで、高熱を出したときのようだ。喉が渴いて仕方なくて、呼吸をするのが辛い。

肌がシーツに擦れるたびに、口から変な声が漏れそうになる。

「なんだ、これ……」

ほんの少しの刺激に反応して下腹が疼いた。途端に、部屋の匂いにも過敏になった。

部屋の中は湊の好きな香りが充満し、嗅いでいるだけで達してしまいそうになる。頭の奥がガンガン響くほど血液が流れていくのが分かる。

熱くて、苦しくて、一人でいるのが辛い。

「あ……っ」

無意識のうちに両手を股間に持って行こうとして、湊は慌てて動きを止めた。珠理のベッドでこんなことをしてはだめだ。

唇を噛んで堪える。

動悸で冷や汗が出てきた。掌と脚も冷たいのに、体の中心だけが焼けるように熱い。

昨夜の酒のせいなら、もっと早く症状が出ているはずだ。

自分の体に一体何が起きたのか分からないが、尋常でないことだけは確かだ。珠理に救急車を呼んでもらえば……と思ったところで「だめだ」と声にした。

トップスターの自宅で騒動は起こせない。

名家である彼の実家でもみ消してくれるだろうけれど、それでも、人の口に戸は立てられない。どこかから話が漏れ、ゴシップ紙が面白おかしく書き立てでもしたら、湊が謝罪するだけでは済まなくなる。

湊はどちらかという、最悪のことを考えながら最善の道を歩もうと努力するタイプなので、この症状が去るまで堪えることに決めた。

立哉がまだ帰宅していなかったら、タクシーを呼んでもらって病院に連れて行ってもらいたいのだが、この状態では彼を呼ぶこともはばかられる。

なんなんだよ、これ……っ！

呼吸をするたび喉が焼けるように熱くて苦しいのに、股間が疼いて陰莖が勃起しているのが分かる。

早く収まれ。

そう願ひ、か細く息を吐いたところでドアが開いた。

「おい湊。そろそろ起きてこい。朝食が」

ドアノブを掴んだまま、立哉が「うわ」と低い声を出す。

「……立、哉」

「……凄いわ、この匂い。頭がクラクラする」

立哉が、顔を赤くして「臭いって意味じゃなくてだな、ちょっと……俺は耐えられそうもない。珠理を呼んでくる」と慌てて部屋から出て行く。

逃げるように出て行った立哉に対するショックと、一人にされた心細さで泣きそうになったところで、今度は珠理が部屋に入ってきた。

「珠理……」

助けを求めようと珠理に手を伸ばしたが、彼の顔を見た途端にどうしようもない劣情に襲われる。とにかく、今、自分の目の前にいる男とセックスがしたい。

それ以外考えられなくて、下腹が熱くなる。

「湊」

珠理が真剣な表情で近づきベッドに腰を下ろし、自分の右手で湊の左手をそっと掴んだ。

「……珠理、俺、セックスしたい。こんなこと言うの、おかしいか？ なあ、今すぐ」

「おかしく、ない。湊はとていい匂いがして、その、なんというか、俺も」

「だったら、なあ。じゃあ頼むから、なあ、俺とセックスしてくれ」

自分は何を言っているんだ。好きだと告白もしていないのに、体の関係を求めるなんて最低じゃないか。いや、でも、こうして縋って体だけの関係でも……！

こんなことを考えるなんておかしい。いつもの自分じゃないと愕然としつつ、徐々に理性が甘くとろけて本能が首をもたげる。快感を追うことに必死になって、切なくてもどかしくて涙が出てきた。

「珠理、我慢できない」

荒い息で呼んだ、次の瞬間。

乱暴にベッドに押し倒されて、唇を押しつけられた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>